

緑爽会会報 No. 202

2025年12月22日発行

日本山岳会 緑爽会

発行人 荒井正人



デザイン・制作 関塚貞亨

~~~《報告》~~~~~

10月山行報告

## 秋の箱根、鷹巣山から浅間山へ湯坂路を歩く

石塚 嘉一

実施日：10月29日（水）

参加者：6名（後掲写真参照）

久しぶりに箱根に行くことになった。緑爽会では、2018年に宮城野から明星ヶ岳、明神ヶ岳に登って以来だ。近年は秋の山行は奥多摩や中央線沿線が多いので趣向を変えてと思って、そして緑爽会らしい意味をとつてつけて、鎌倉時代の古道の湯坂路を歩くことになった。

箱根湯本駅に集合して、登山鉄道に乗り換えて小涌谷駅で下車。平日だが半分以上が外国人の観光客で電車は満員に近い。登山電車の窓の外に、色づき始めた紅・黄葉が美しいし、天気もよい。数年前に、多摩支部で辻橋さんの企画で行ったことがある同じコースなら安心だろうと高を括っていたが、辻橋さんも、その時の報告を書いた富澤さんも石塚も、みんなうろ覚えで、小涌谷駅を出たところで、登山口はどちらへ行けばいいのか、心もとない。

幸運なことに、学生の頃から箱根の山々を歩き回っていて、箱根は地元だと言う中村さんが急に参加されることになって、ガイド役を買って出てくださったので、安心して彼女について歩くことにした。

小涌谷駅前から坂道を上るとまもなく「千条の滝通り」の標識があり、山道に入るところに「金型はこね荘」の古びた立派な建物があって、かつて企業や業界ごとに保養所を建てて賑わった良き日の箱根を想う。

山道に入ってすぐに千条の滝に出る。「せんじょう」と言ったら「ちすじ」ですよ、と中村さんから訂正された。10メートルぐらいの長さで高さ2.5メートルぐらいの壙のような溶岩の間から水が何条にも流れ落ちる滝で、深山の滝のイメージとは程遠い。その前で、みんな並んで、ちょうど山から下りてきた男性にカメラのシャッターを押してもらった。

そこから急な登りになり、すぐに浅間山への分岐で鷹巣山への道を登る。ここ「たかのす」山は、各地に多い鷹ノ巣山とちがって、鷹と巣の間に「ノ」が入らない表記だ。展望はほとんどない

## 目 次

ページ

### 《報告》

- 10月山行報告 秋の箱根、鷹巣山から浅間山へ湯坂路を歩く 石塚 嘉一
- 初秋の箱根路を歩く 中村 好至恵

### 《寄稿・投稿》

- 西堀栄三郎さんからの手紙 芳賀 孝郎
- 年齢入りの有志閑談会寄せ書き 南川 金一

### 《ようこそルームへ》

- 『緑爽会会報』No. 201 の記事から 夏原 寿一

### 《予告など》

- 1月新年山行  
編集後記  
次号予告

別紙：年次晚餐会（展示会について）、忘年会速報

別冊：講演会「創立間もない山岳会を彩った人々」南川金一

が、樹間から周りの山が見えて、ドーム状の山が金時山だと中村さんから教えてもらう。センブリや秋の野菊の種類の花の名前を富澤さんに訊きながら、ジグザグの急な山道を登る。

滝から 50 分ほどでやっと緩やかな尾根の鞍部に出て、湯坂路に合流。左に行けば浅間山で右上が鷹巣山の分岐だ。12 時を過ぎていたが更に 30 分登り、鷹巣山 (834m) に着いた。直下には、独特の形をして鮮やかな青紫色のトリカブトの花があちこちに咲いているので、写真を撮る。ヤマトリカブトの種類で、この地域に見られるのはハコネトリカブト（花期は 9~11 月）というのだと帰ってから見た図鑑に出ていた。

山頂は小さな広場になっていて、豊臣秀吉の小田原攻めに備えて後北条氏が築いた城の一つがあったと「鷹巣城跡」の説明板にあり、何故かわからないが、大日如来の石柱があつて、そばのテーブルとベンチで遅い昼食をした。



来た道を鞍部まで戻り、緩い山道を 15 分ほど登ると明るく開けて草原風の浅間山 (802m) に着いた。ここにも説明板があり、浅間山と呼ばれる前は、下鷹巣山と言われていて、鷹巣城があったのはここだと思われる、と書いてある。どちらの説明が正しいのかわからない。ここから湯坂路は、両側にハコネザクラ

(フジザクラやマメザクラとも) やヤマザクラが紅葉し始めた広い尾根道が湯本まで続くのだが、10 分ほど行ってさらに広くなった草原の、大平台への分岐に下りたところで、中村さんが、我々の脚ではいまから明るいうちに湯本まで歩くのは無理だから



大平台駅に下るのがいい（左から）小林敏博、富澤克禮、中村好至恵、辻橋明子、鳥橋祥子、石塚嘉一と言われて、大平台に下ることにした。出発したのも遅かったが、すでに午後 2 時 15 分だった。

概ね緩やかな、落ち葉の積もった道には、浅間山までの里程を示す合目石が、あまり均等と思えない間隔で建てられている。だから、最後は早足で歩いたせいか、2 合目石から 1 合目石までは 5 分しかかからなかった。下り始めてすぐのところに、古びて粗末な浅間神社の小さな社があった。この浅間山に登るいくつかのルートのあちこちに浅間神社があるらしい。分岐から 1 時間 15 分で大平台登山口に出て、控えめな（古びた感じの）温泉街の中の自動車道路を 10 分ほど下ると箱根登山鉄道の大平台駅に着いた。小涌谷もここも無人駅だった。

電車の窓から周りの山を眺め、中村さんが歩き回っていた頃の話を聞いているうちに湯本駅に着いたら、もう暗くなり始めていた。

行程：箱根湯本駅 10 時集合⇒小涌谷駅 10:50→11:20 千条の滝→12:15 鞍部、鷹巣山・浅間山分岐→12:45 鷹巣城跡・鷹巣山（昼食）13:10→浅間山→（湯坂路）→14:15 大平台・湯本分岐→15:30 大平台登山口→15:40 大平台駅⇒16:08 湯本駅

## 初秋の箱根路を歩く

中村 好至惠

久しぶりの山歩き、“地元神奈川・箱根”の例会に参加しました。ちょうど個展準備に追われている真っ最中で、急に日程に気づいての「ドタ参加」でしたが、リーダーには快く受け入れて頂き、息抜きとリフレッシュの一日となりました。歓談しながら皆さんとご一緒できる楽しさ、しかも当日は植物観察では「鬼に金棒」の富澤さんがいらっしゃいました。

箱根湯本駅からの箱根登山鉄道 3両は沢山のインバウンド客（多くが欧米で時折インド系）の方たちでひしめいていました。満員の乗客を乗せた列車は 80%（パーセント=1000m走る間に 80m の標高を登る）の急勾配を力強く昇っていきます。これは粘着式（線路と車輪の摩擦粘着力だけで登る方式）では日本一です。

さて、スイッチバックを繰り返しながら到着した標高 523m の小涌谷駅。満員だったのにそこで下車したのは私たちだけでした。駅前の国道 1 号からすぐに町なかの急坂を登っていくと、右手に箱根を代表する明神ヶ岳と明星ヶ岳が見えます。当日はあまり展望のない箇所を歩くので、まずここで景色を楽しんで千条の滝へ。<sup>ちすじのたき</sup>ここから登りが始まりますが、富澤さんのレクチャーでキク科を中心とする秋の花々を観察しながらの登りは楽しさいっぱいです。途中、木々の間から特徴的な金時山の姿が見えました。

鷹巣山への最後は階段状の急登アルバイトでそれなりに時間を食い、皆さんお腹もペコペコ。山頂に到着するとすぐにちょっと遅いお弁当となり、ベンチ貸切りでご機嫌なひととき。周囲はまだ紅葉には早く緑が勝っていましたが、スキはすでに斜光に輝き秋の風情です。次なる浅間山周辺は桜の木が多く、春には新緑と桜の共演でそれは美しい世界を歩いたことを思い出します。

下山は湯坂道を箱根湯本までの予定でしたが、日も短い季節の長い下りはやめてショートカットの大平台駅への下山に変更となりました。それが意外と歩きやすい山道で、また私としては帰りにも箱根登山鉄道に乗れるのでルンルンでした。

箱根七湯と言いますが、大平台はもっと小さな庶民的な温泉街で、かつて射的場が残っていたのを記憶しています。今では「姫之湯」という駐車場付きの立寄り湯があり、箱根では珍しく気軽に温泉が楽しめる場となっています。穴場的で静かな大平台駅から箱根湯本に下ると一気に観光客の賑わいとなり、上手いこと見つけた蕎麦屋での反省会後の駅舎では、温泉街からの夕なずむ箱根の山並みがシルエットで見え、旅情を感じさせる締め括りとなりました。楽しい一日を、ありがとうございました。



~~《寄稿/投稿》~~~~~

## 西堀栄三郎さんからの手紙

芳賀 孝郎

1981年3月、西堀先生から一通の手紙が届いた。開封してみると「君の秘書は日本山岳会の会費を支払うことを忘れているようだ。直ぐに秘書に命じて会費を振り込むように」との内容であった。早速女房へ振込みを指示したところ「私は貴方の秘書ではありません」との返事で、私が郵便局へ振込みに行ったことを思い出す。

当時西堀先生は日本山岳会13代会長であった。先生の「南極越冬記」の本の中に3年分の山岳会会費の領収ハガキが挟まっていた。

私はユーモア溢れる先生の手紙のお蔭で2007年永年会員（50年）となった。

先生は三高時代に得意の英語でAINSHUTAIN博士を京都案内している。更に先生は語学力と外交手腕でマナスル登山許可の獲得に成功した。マナスル登山の立役者である。

1952年、先生は「インド科学会議」に木原先生の随員として参加した。先生の語学と外交力で当時ネパール政府の外交の実権を持つインド政府と交渉し、ネール首相に直接お会いし、日本人として初めてネパールに入国した。9日間ネパールに滞在して国王、首相にマナスル登山許可を直訴した。

カイザー将軍の館を訪問した時、将軍の部屋に明治天皇の肖像画が掛かっていた。それを見た先生は明治天皇についてお聞きしたところ「貴方は直ぐ明治天皇に気が付いた。明治天皇の偉業を良く知っている人と判った。日本を近代国家に築き上げた天皇を尊敬し、私の目標としている人物である」と将軍は答えられ、登山申請に協力の意思を示した。

1952年5月8日付のマナスル登山許可書を受け取った京都大学は、A A C Kの今西錦司、桑原武夫、西堀栄三郎らが協議して日本山岳会へマナスル登山の計画を委譲した。

これが8千メートル峰マナスル登山の始まりであった。

2011年3月10日、私は女房と共に西堀邸を訪問した。その目的は日本山岳会会員20名余を案内して、西堀先生の思い出を語る会を開くための打ち合わせであった。

先生のマナスルのこと、南極のこと、科学者としてのこと、リーダーシップ等についてご子息の峯夫さんと話しあった。

私が初めて西堀邸を訪問したのは学生時代、泰安先輩にお供したことであった。当時家の前に植えられていたヒマラヤ杉は、細い木であった。60年の間に細い木が大きく成長し、大木となり二階の屋根に覆いかぶさっていた。その時の先生の言葉をいろいろ思い出した。

「南極やヒマラヤへ行くことは非常識の行為である。行きたい者は自分の頭を非常識に変える必要がある」

「南極越冬隊のチームワーク作りには、各隊員への越冬目標を持たせた。隨時目標の進捗状況を報告させる。人間は暇になるとろくでもないことを考える」

「京都大学助教授の時、東芝に居る先輩から東芝は問題の多い会社と聞き、東芝に近い鶴の木に關東大震災にも耐える家を作り、東芝に勤務した」等々興味ある話であった。

西堀邸での座談会は私が司会を務めた。先生の子息・峯夫さんと息女・暁子さんの特別参加にマ

ナスルの松田雄一、南極越冬の芳野赳夫、山の自然学の大森弘一郎の各氏が先生に関わる話をした。更に先生の作詞した「雪山讃歌」の歌に及んだ。最後は全員「雪山讃歌」を歌い愉快な集いは終了した。

峯夫さんは「今後西堀邸を如何にして活用し、存続していくか」を考えていた。南極の仲間と山岳会の仲間の集会所、宿泊施設にする計画を聞いた。峯夫さんはその日泊まっていくように言われた。しかし翌日用事があり失礼した。翌日が東日本大震災の日であった。

峯夫さんはその2年後ドイツで客死したと連絡があった。

## 田口二郎さんのこと

1953年 第1次マナスル隊は三田幸夫隊長の率いる12名のメンバーであった。

隊員には欧洲アルプス登山経験者の高木正孝、田口二郎、ナンダゴットの竹節作太、興安嶺・蒙古探検の加藤泰安らの侍たちがいた。

加藤泰安は「三田さんは一度も命令を出さなかった隊長であった」と評している。侍隊員との合議した登山隊であった。三田隊長は、羽田での帰国の挨拶で記者団に「実に楽しい登山であった」と報告した。周りの山岳会理事が隊長の耳元でささやいた後、隊長は「日本国民の声援を受け8千メートル峰登頂を目指したが、あと320mを残して撤退したことは誠に残念であった」と述べた。隊員の田口二郎は誠に愉快な遠征であったと第1次マナスル隊を評価している。

田口二郎は甲南高校山岳部から東大スキー山岳部で活躍した後ロンドン大学に留学した。スイス滞在中に第2次世界大戦が勃発した。スイス人と結婚し、山岳ガイドの資格も取得した。その後、朝日新聞ヨーロッパ支局に勤務した。戦争で朝日新聞支局はドイツからスイスに移転した。支局長は日本を代表するジャーナリスト・笠信太郎であった。

笠はスイス在住のAINシュタイン博士とのインタビューを企画した。しかし博士はナチス・ドイツとの同盟国日本の新聞社との取材には絶対に応じないと返事であった。困り果てた笠は、田口に博士の取材方法について相談をした。田口はAINシュタインが日本を訪問した記録を調べた。山仲間の西堀栄三郎が博士を京都の街を案内したことを知った。早速西堀先生へ連絡を取った。

先生からの返事は、“AINシュタイン博士を京都案内し、「すき焼き」をご馳走した時に、博士は世界最高のご馳走と大喜びした。「すき焼きをご馳走する」と言って誘い出しては如何”とあった。西堀先生のすき焼き作戦は成功し、博士も笠支局長も大満足した。

私は田口二郎から興味ある話をいろいろ聞いた。田口は第2次世界大戦中スイスにいて日本の諜報機関が終戦交渉に關係した話もあった。その話はそのうちにゆっくり聞かせてやることであったが残念にも亡くなられた。

田口二郎の著書は『山の生涯』『東西登山史考』ボニントン『現代の冒険』等多数ある。

私は『東西登山史考』から、特に英國山岳会の登山流儀と欧洲大陸との登山流儀の違いと接点について多くを学んだ。

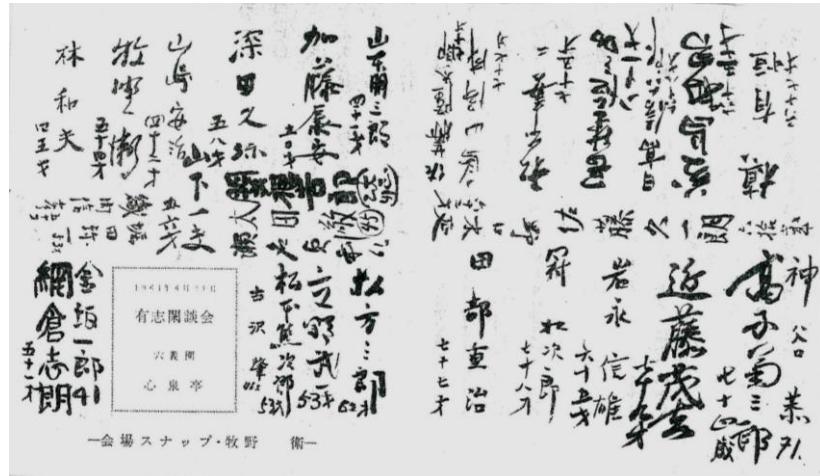
(編注) 西堀邸訪問のことについては、「緑爽会のあゆみ」に、「2011年4月2日、多摩川土手のお花見と旧西堀邸訪問と懇談会」とあり、その模様は会報97、98号に掲載されている。

## 年齢入りの有志閑談会寄せ書き

南川 金一

会報No.216（1961年8月）に載る有志閑談会の寄せ書きは、出席者33名全員の年齢をも書き込むという珍しいもので、貴重な資料である。長老と目されていた人たちの年齢の若いことに驚かされる。最高齢の岡埜徳之助81、次いで近藤茂吉79、冠松次郎78、鳥山悌成・田部重治77。長老としてのイメージのある槙有恒67、藤島敏男65、松方三郎62、深田久弥58などは驚くほど若い。そして何よりも驚くのは、自分の歳が最高齢の岡埜徳之助よりもはるかに上だということである。「馬齢を重ねる」とは、実感のこもった言い方だと思う。

ちなみに、会員番号は古い方から鳥山悌成 73、日高信六郎 142、高木菊三郎 162、冠松次郎 237、田部重治 243、近藤茂吉 260、岡埜徳之助 271、槇有恒 341、松本善二 459、松方三郎 547、岩永信雄 628、藤島敏男 710、神谷恭 744、佐藤隆太郎 751、野口末延 806、山下一夫 954、交野武一 1068、堀田弥一 1231、加藤泰安 1257、関根吉郎 1469、深



田久弥 1586（以下略）である。また、享年を調べてみると、堀田弥一 102、牧野衛 100、槙有恒・野口末延 95、松本善二 94、岡埜徳之助・太田敬 92 であるから、岡埜徳之助はこの頃はまだ矍鑠としており、大方はまだ人生の半ばである（会員番号と享年は筆者が調べたもの）。

「有志懇談会」という集まりは戦前も清水谷皆香園で開かれていた。戦後のそもそもは、1953（昭和28）年、駒込の六義園心泉亭で開かれた「清水谷皆香園時代を偲ぶ会」で、その案内状には「名誉会員の長老を御招きし、併せて木暮さんのありし日を偲び会員各位の親睦を計り度く…」との趣旨で、世話人から有志に呼びかけられた。その会には当時の名誉会員の全員である高野鷹蔵、武田久吉、鳥山悌成、田部重治、近藤茂吉、中村清太郎の6人を始め29人が出席。2回目は6年後の1959（昭和34）年。以降は有志閑談会としてほぼ毎年開かれるようになった〔以上は『日本山岳会百年史』の「クラブとしての伝統形成（関塚貞亨）」による〕。有志閑談会は長く続いてきたが、数年前をもって幕を閉じた。会の草創期を知る会員と面識のあった世代の会員が他界し、以前のような雰囲気を期待するのは難しくなった。

有志閑談会は、世話人が翌年の会の世話人を指名する形で引き継がれ、私も毎回の世話人から案内状をもらっていて有り難いことではあったが、出席したことはなかった。山岳会総会の翌週に開かれて、私にとっては時期が悪かった。3月初旬から6月中旬頃までは残雪期であり、貴重な時期だった。その間の週末は10数回であり、天候に恵まれる機会は10回もない。その数少ない機会を最大限生かすためには週末に約束を入れないことである。ところが、機関誌の編集を担当していると、総会での発言を頭に入れておかなければならぬ。総会に出て、その日の天気がよくて悔しい思いをすることが再三であった。翌週もそのような思いをするのはまっぴらなので、有志閑談会には行かないことにしていたのである。

それほどまでに山に入れ込む身からすると、有志閑談会は「山へ行かない暇人の集まり」というイメージもあり、いずれ山へ行かなくなったら参加すればよいと考えていた。私の最後のテント泊の山は、岐阜県側からの白山山塊で、74歳だった。その後も残雪期の山は80歳近くまで続いた。そろそろ有志閑談会に出席しようと考えていた矢先で案内状は来なくなった。

## + + + + + ♦ + + 《ようこそ、ルームへ》 + + ♦ + + + + +

『緑爽会会報』No. 201 の記事から

夏原 寿一

### ・「創立間もない山岳会に彩りを添えた人びと」(3頁)

下から9行目に「…100周年までの入会者 14237名分の…」の一文がある。私の会員番号は14234なので、100周年の年の最後に滑り込みセーフだ。では、次の100年への栄えるトップバッター「14238番」は誰か？ 同期入会者の名簿を見てみたら…、それは我が緑爽会の瀬戸さんだった。＼(^o^)／

### ・「高尾山健康登山を成満して」(6~8頁)

“高尾山病”に罹った富澤さんは記事に、「下山後は高尾駅近くのなじみの店で、三人からお祝いの宴を開いていただきました。素晴らしい、充実した一日でした」(6頁 上から14行目)と仲間との楽しい時間を書き、「…登山は、健康を維持し増進する為には素晴らしい効用が認められます」(7頁 下から9行目)とご自身の健康状態を例に書かれている。

これを読んで思い出したことがある。それはマッターホルンをはじめ、アルプスで数々の初登頂を成し遂げたエドワード・ワインパーが自著『アルプス登攀記』の最終章に、「アルプスでの想い出を全て消し去っても私には残るものがある。それは人間にとて最も大切な2つのもの、『健康と良き友』だ」と書いていることだ。相通ずるものを感じる。

★写真：2022年1月山行「八十八大師巡り、その2結願」で撮影



～～《予告など》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～  
1月新年山行 下谷七福神めぐり

七福神めぐり再開3回目は、下町の風情を楽しめる下谷七福神を巡ります。コースには、入谷の鬼子母神、境内に国的重要有形民俗文化財に指定された富士塚のある小野照崎神社や酉の市で有名な鷺(おおとり)神社などがあります。JR鷺谷駅をスタートして昭和の雰囲気が残る東京メトロ日比谷線 三ノ輪駅まで歩きます。

実施日と集合場所：2026年1月8日(木) 10時30分 JR鷺谷駅北口改札口(赤羽、池袋寄り)

行程：JR鷺谷駅→元三島神社(寿老人)→入谷鬼子母神(福禄寿)→英信寺(三面大黒天)→法昌寺(毘沙門天)→弁天院(朝日弁財天)→飛不動尊正宝院(恵比寿神)→寿永寺(布袋尊)  
総行動時間約2.5時間(歩行時間約1時間)

※三ノ輪で懇親会を予定しています(希望者)。小腹が空くと思いますので、軽い行動食をお持ちください。

申込先：1月6日(月)までに下記へお願いします。

小林

荒井

※2月は山行を予定していますが、詳細は七福神めぐりの頃にお知らせいたします。

※2026年度総会は2026年4月中旬を予定しています。詳細は会報203号でお知らせいたします。

### 会員異動：新入会員

- ・高砂寿一（としかず・15326） 東京多摩支部

今号は少々変則ですが、9月の南川会員の講演会については、ご本人にまとめていただいたものを別冊とし、今月は年次晚餐会、その翌週に緑爽会の忘年会もありましたので、速報的にそれを別紙1枚モノとしました。

晚餐会では展示会の中に「人生100年時代の安全登山」というコーナーがあり、そこでは「山とともに生きる一人生を豊かにした10人の物語」というタイトルで10人の会員にインタビューした内容が写真と共に展示されました。その半分の5人が緑爽会会員です。創立30周年祝賀会に橋本会長ほか医療委員会のお二方が出席されましたが、そのお三方によるインタビューです。

### -----編集後記-----

今号の発行は22日に早めました。最近の郵便事情を考慮すると25日発行では年内に配達されない可能性もあると判断したからです。年末年始の読み物として間に合うように祈っています。

今年は5月下旬から記念号の原稿依頼を始め、猛暑の夏の間は記念号の編集でパソコンの前に随分長く座っていました。何としても全員から一言をと思ったのですが中々難しく、電話で取材とも言えないお話を書かせていただいた方もあるって、今となっては、これで良かったのだろうかと思うことがあります。それでも会の歴史の節目に記念号など形として残せたことは良かったと思います。何はともあれ今後の毎年、毎月の普段の活動が大切だと考えています。山登りもしつつ、皆さんのご意見も伺いながら、緑爽会らしい活動を企画、実行していきたいと思っています。また来年もよろしくご協力をお願いいたします。(荒井正人)

今年は3つの講演会、祝賀会、記念誌発行など創立30周年に相応しい事業を無事に終えることができ、皆さまのご協力に感謝申し上げます。晚餐会の展示「人生100年時代の安全登山」では10時過ぎに大きな巻物のようなポスターがボードに掲示され、展示担当として誰よりも早くインタビュー記事を読むことができました。山だけではなくこれまでの生き方を語っていることが印象的でした。(小林敏博)

前号で、南川さんの「創立間もない山岳会を彩った人々」の講演会に来た会員が少なかつたと、嘆いたが、今号の別冊で4ページに亘ってお話の内容をご自身でまとめておられる。貴重な資料です。何かの都合で講演を聴きそびれた方も、聴いた方も、長年の調査研究の成果(の一部)を読んでほしいと思います。(石塚嘉一)

2025年もあつという間に終わりそうです。今年は緑爽会30周年記念もあり、緑爽会にとって記念すべき年でした。間もなく新しい2026年が始まりますが、何かワクワクするような一年になればと思います。ワクワクすることは、若さをキープする1つの要因と聞きました。来年も健康で皆様と山歩きしたり、話したり、知らない世界に目を向けたりしたいと思っています。(横関邦子)

<2月25日発行の主な内容>皆様からの投稿をお待ちしています

下谷七福神めぐり報告、南川さんの新連載など